

紹介

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序

——N・I・ラーピン論文の紹介——

細見 英

この夏、『経済学史学会年報』第八号に収録する文献抄録の分担分として、名古屋大学の水田洋氏から私に割りあてられてきた六点の外国文献のなかに、『ドイツ哲学雑誌』一九六九年二月号所収のN・I・ラーピンの論文、「マルクスの『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」⁽¹⁾が含まれていた。一年半もまえに発表されたものなのに、うかつにも私は、それまでこの論文の存在に気づいていなかった。読んでみると、ひじょうに有意義な好論文である。とくに、(1)マルクスの『経済学ノート』と『経哲草稿』の関係、(2)『経哲草稿』第一草稿の執筆順序、この二点について、

ニークで示唆にとむ内容をふくんでいる。『経済学史学会年報』の文献抄録は、一つの論文をわずか二〇〇字で要約することになっており、ラーピン論文については相当オーバーして抄録しておいたものの、当然ながらほんの骨子を摘記するにとどまった。『経哲草稿』はもとより『経済学ノート』についても関心が高まっている今日、ラーピン論文はこれらの研究に役立つところが少なくないと思うので、あえてこの誌面をお借りして、やや詳細な紹介をこころみる次第である。

(1) Nikolai I. Lapin, Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in der „Ökonomisch-philoso-

phischen Manuskripten“ von Marx. Deutsche Zeitschrift für Philosophie, Jg. 17, Heft 2, 1969. SS. 196-212.

(2) 『経済学ノート』をめぐる内外の動向については、杉原四郎・重田晃一訳『経済学ノート』第二版（未來社、一九七〇年一月）に付加された増補解説を、ぜひとも参照のこと。この紹介文の執筆中に私は、重田晃一氏から右の増補解説の校正刷りを見せていただき、綿密でゆきとどいた論述から多くのことを学んだ。記して感謝の意を表した。

一 『経済学ノート』と『経哲草稿』

N・I・ラーピンは、『若きマルクスの思想的遺産をめぐる闘争』（モスクワ、一九六二年）⁽¹⁾、『若きマルクス』（同上、一九六八年）といった、小冊子ながら内容ゆたかな著作をものしている。ソビエトの初期マルクス研究者である。『ドイツ哲学雑誌』に掲載された論文は、⁽²⁾短い序言にはじまって、次の三つの節からなっている。

一、一八四四年におけるマルクスの経済学研究の段階区分。

第一段階の開始

- 二、三つの平行する本文と、その真の背景
- 三、対比的分析の構造と論理

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序（細見）

序言でラーピンは言っている。『経哲草稿』についてはこれまでずいぶん書かれもし、論争もおこなわれてきた。しかし、「この草稿の理論的内容、その論理的な構造と力学を解明しよう」としながら、研究者たちは、マルクスが草稿のある部分から他の部分へ、したがってまた、一つの思想群とその仕上げの状態から他のそれへと、実際に移っていった（移っていったはず、というだけでなくて）現実の、時間的順序を、しばしば無視している。この現実の順序を確定するためにはその前提として、理論的な分析だけでなく、もとの原稿を实地に見て検討することをも含めた文献考証的な分析を、必要とする。これをおこなうとき、素材の編成順序における若干の重要な特徴や、筆跡上の特質などを、明るみに出すことができるだろう。

ラーピン論文は、モスクワのマルクス・レーニン主義研究所中央党アルヒーフに保管されている、『経哲草稿』オリジナル原稿のフォトコピーを手にしながら、その第一草稿のうち「疎外された労働」に先だつ部分、すなわち、「労賃」「資本の利潤」「地代」の部分について、右にいう文献考証的分析と理論的分析とを結合しておこなうことによって、この部

分の執筆順序を推定し、マルクスの分析的思惟の歩みを明るみにだそうとしたものである。この本論が、第二節と第三節で展開される。第一節ではその前置きとして、一八四四年の夏、『経哲草稿』脱稿のころまでの、マルクスの経済学研究の段階区分をこころみている。まずその紹介からはじめよう。

すでによく知られているように、この時期のマルクスの経済学研究のあとを示す資料としては、セー、スマスをはじめとする経済学者たちの著作から抜粋し、それに評注をくわえた『経済学ノート』（一八四四年夏ごろまでには五冊のノート）と、三つの草稿からなる『経哲草稿』とが残されている。ところで問題は、経済学ノートと『経哲草稿』との執筆順序からみた関係である。五冊のノート↓『経哲草稿』か。いや、事態はそう簡単ではない、とラーピンはいう。
(3)

ここで五冊のノートの内容を瞥見しよう。
ノートⅠ——セー『経済学概論』からの抜粋と評注。セー『応用経済学全講』、スカルベク『社会的富の理論』からの抜粋。

ノートⅡ——スマス『国富論』からの抜粋と評注。

ノートⅢ——ルヴァスール『回想記』からの抜粋。スマス『国富論』からの抜粋と評注。

ノートⅣ——クセノフォンからの抜粋。リカード『経済学と課税の原理』からの抜粋と評注。ジェームズ・ミル『経済学綱要』からの抜粋と、かなり長い評注。

ノートⅤ——マカロック『経済学の起源、進歩、固有の対象および重要性にかんする講義』からの抜粋と評注。デステュット・ド・トラシイ『イデオロギー要論』からの抜粋。ジェームズ・ミル『経済学綱要』からの抜粋と短い評注。

このノートに、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』からの抜粋を記した紙片がはさまれている。

さてこの五冊のノートのうち、ノートⅠ・Ⅱ・Ⅲでのセー、スカルベク、スマスからの抜粋は、第一草稿に全面的に利用されている。ところがノートⅣとノートⅤでの、リカードやミルからの抜粋と評注は、第二、第三草稿では広範に活用されているけれども、第一草稿ではその痕跡がまったく見あたらない。第一草稿のなかでリカードを引用している唯一の箇所も、ビュレの書物からの孫引きである。とりわけ、ミルから⁽⁴⁾の抜粋に加えたかなり長い評注（いわゆる「ミル評注」）では、

交換・貨幣・疎外にかんするマルクス独自の展開がこころみられていたのに、その内容は第一草稿では、「疎外された労働」断片においてさえ、なんら反映されていない。第二、第三草稿では、「ミル評注」の反映を明確にみてとれる。

こうしたこと、さらに一般に、第二、第三草稿で示されている経済学的知識の水準が、第一草稿におけるよりもいじり高く高いことから、ラーピンは、一八四三年末から一八四四年八月にかけてのマルクスの経済学研究を、次の二つの段階に区分するのである。

第一段階 経済学の著作との出会いから、第一草稿の執筆まで。

第二段階 リカード、ミルらの著作の抜粹（ノートⅣ・Ⅴ）から、第三草稿の仕上げまで。

第一段階はさらに次の諸階程に区分できる、という。

イ、エンゲルス、ブルードンらの経済学的著作との最初の出会い

ロ、セー、スカルベク、スミスの著作からの抜粹（ノートⅠ・Ⅱ・Ⅲ）

ハ、所得の三源泉の分析（第一草稿の前半）

【経哲草稿】第一草稿の執筆順序（細見）

ニ、疎外された労働の本質にかんする思想の形成と展開（第一草稿の後半）

ところで、ラーピンの区分する「二つの段階」は、この時期におけるマルクスの、エンゲルス『国民経済学批判大綱』との「二度にわたるとり組み」と密接に連関している。『大綱』からの抜粹レジュメは、ノートⅤにはさまれている。だがこれは、ラーピンによれば、マルクスの『大綱』との最初の出会いを記録するものではない。最初は、『独仏年誌』編集部にエンゲルスが原稿を送ってきた一八四四年の一月に、原稿の段階でマルクスは注意深く読んだはずだ。そのときはマルクスは、『大綱』のうち、当時から自身がかもとも関心をいだいていた問題、すなわち、資本と労働の関係、資本主義社会の根本法則としての普遍的競争とその諸結果を論じた部分に、とりわけ注目をよせたのであって、この視角は、第一草稿における所得の三源泉分析に明白な影響を及ぼしている。

第一草稿の執筆ののち、リカード、ミル、マカロックらの著作から抜粹し評注を加えていく過程で、マルクスの問題関心は、価値論、価値を規定する諸要因の問題にひきつけられ

ていった。そこでこの問題視角からマルクスは、もう一度エンゲルスの『大綱』を——こんどは活字になった『大綱』を、読みかえしてレジュメをつくる。『大綱』からの抜粋レジュメがノートⅤにはさまれていること、その内容が『大綱』の全範囲に及ばないで、とくに価値規定をめぐるセー・リカード論争、これにたいするエンゲルスの立場と見解に集中していることは、こうした経緯を反映するものとみてよからう。

「したがって」とラーピンは結論する、「マルクスが二度にわたってエンゲルスの労作ととり組んだという事実は一八四四年におけるかれの経済学研究に二つの主要段階が存在することと関連しており、これら二つの段階のそれぞれにおけるかれの関心の違いと、厳密に経済学的な問題へのつっこみの深まりを反映している。マルクス主義の創始者たち相互の最初の結びつきの特徴としてさらに特筆すべきは、マルクスがいずれの段階の始めにおいても、かれが当時はじめてぶつかったあの複雑な諸問題の解決にあたって、その方向づけを、いずれのばあいもまさしくエンゲルスの労作からひき出していることである」と。

このラーピンの指摘は、まことに示唆ぶかい。もっとも、

エンゲルスの『大綱』からひきだした「方向づけ」を、マルクスがいかにかれ流につっこんでいったか、——経済学批判の発端におけるエンゲルスとマルクスの視角の継承と乖離、もしくは深化の問題は、たしかに残る。また、一八四四年におけるマルクスの経済学研究を二つの段階に画することの当否も、多分に検討の余地があるといわなければならない。それにしても、五冊の経済学ノートと三つの草稿の執筆順序としては、ラーピンの説くところ（ノートⅠ・Ⅱ・Ⅲ↓第一章稿↓ノートⅤ・Ⅵ↓第二章稿）が、ほぼ的を射ているように思われるのである。

この点について私は、反省をこめて自説の訂正をおこなわなければならない。

『経済学ノート』のなかで、『経哲草稿』の疎外論との関連でもっとも注目すべきは、ノートⅤにふくまれている「ミル評注」である。これまで私は、「ミル評注」と『経哲草稿』について、前者から後者への執筆順序を推定し、この推定にもとづいて、一八四四年時点におけるマルクスの経済学研究成果と課題の整理をこころみてきた。⁽⁶⁾ この私の推定は、「ミル評注」と『経哲草稿』の「疎外された労働」断片とに

おける、マルクスの分析視角と範疇展開の次元の差異への着目と、その方法的意義への反省にもとづく。

「ミル評注」では、商品交換の発生を決定的契機とする、社会的人間の疎外の諸形態が展開されている。交換を契機とする私的所有の「疎外された私的所有」＝「価値」への転化、おなじく交換の前提のもとでの労働の「疎外された労働」＝「營利労働」への転化。商品交換体制の内部における価値の形態的展開としての「貨幣」、「信用」、「銀行制度」。これにたいして『経哲草稿』の「疎外された労働」断片でマルクスがえぐりだしているのは、マルクスの前提としても内容の實質からいっても、資本＝賃労働関係であり、そこにおける労働の疎外＝搾取の関係である。おなじく基礎範疇として「疎外された労働」と「私的所有」の用語が用いられていても、「ミル評注」でその内実はず「商品生産労働」と「商品」であり、「疎外された労働」断片でのそれは、「賃労働」と「資本」である。「ミル評注」における、商品交換視角からする社会的人間の疎外の形態的展開。「疎外された労働」断片における、労働過程視角からする人間的労働の疎外＝搾取関係の究明。両者の方法視角と論理展開次元の相違は明らかであ

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序（細見）

る。しかも、「ミル評注」と『経哲草稿』とを対比するとき、この二つの方法視角、二つの論理展開次元をつなぐ媒介の論理が欠けている。そこには断絶があるといわざるをえない。マルクスの経済学批判の方法の生成という観点から、この断絶をどう評価し解釈するか。

この問題を私は、マルクスの近代市民社会批判の基本視角における大きな流れ、すなわち、ヘーゲル市民社会論によって色濃く影響された近代社会＝「市民社会」把握から、その基底をなす階級的搾取＝資本関係の抽出へ、そしてそこに見えてきた人間的社会的諸契機をふまえつつ、市民社会の総体構造の批判的再構成へ、という流れのなかに、「ミル評注」と『経哲草稿』を位置づけることによって解こうとこころみだ。——「ミル評注」でマルクスは、商品交換関係の分析から出発しながら、そこから階級関係を論理的に演繹することに失敗した。そこであらためて三階級の対抗そのものを分析の出発点にすえ、分析をつうじて階級対抗の根拠としての「疎外された労働」をえぐりだした。交換関係視角から生産関係視角へ、表層分析から深層分析へ。分析視角の深化という点からいっても、執筆順序は「ミル評注」から『経哲草

稿」へのはずだと、まさしく推定したのである。そして、一八四四年段階においてはなお断絶したままの二つの視角ないしは論理展開次元、すなわち商品関係と資本関係とが、必要な媒介の論理と範疇をえて首尾一貫して展開されるのが、『経済学批判要綱』においてであると展望した。

マルクスの近代社会批判の展開の大きな流れとしては、私の構想するところに間違いはないとしても、この大きな流れに「ミル評注」と『経哲草稿』とを機械的にあてはめたことは、なんとしても臆断であつたといわなければならぬ。私はいま、マルクスのノートや草稿内容の綿密な考証をなおざりにして臆断をくだしたことを反省し、「ミル評注」と『経哲草稿』の執筆順序の問題については、これまでの解釈を撤回してラーピン説に拠らうと思う。⁽⁷⁾

その上でなお、「ミル評注」と『経哲草稿』との、方法的・内容的な区別と関連の問題は、いぜんとして残る。

『経哲草稿』をひとまとめにして「ミル評注」と対比するのでなく、ラーピンのとくのように、第一草稿と第二・第三草稿のあいだに「リカード評注」「ミル評注」を位置づけるとき、三つの点は明らかである。①第一草稿「疎外された労働」断片と「ミル評注」とのあいだに、考察視角の転換が存在すること。②「疎外された労働」断片でうたされた基本視角、すなわち労働の疎外とその止揚の観点が、第二・第三草稿をもつらぬいていること。③「ミル評注」での展開が、第二・第三草稿においてたしかに「反映」されていること。

②の点、すなわち第一草稿と第二・第三草稿との連続性を確認するとき、「疎外された労働」から「ミル評注」への転換を、マルクスの経済学批判の基本視角における転換ととらえることはできないであろう。労働の疎外とその止揚という基本視角は堅持したうえで、分析視角の転換といふべきである。この点については、「疎外された労働」断片におけるさいごの問題設定が、示唆的である。マルクスはいっている、これまでは疎外された労働とその結果を労働者について、考察してきたが、「つぎにはわれわれは、労働と労働者にとつて、疎縁な人間の、労働者にたいする関係、労働とその対象にたいする関係を、考察することにしよう」と。マルクスによるリカード、ミルらの研究は、まさにこの課題にこたえるべく着手されたものとみてよいであろう。

おそらくリカード、ミルの研究をふまえて書かれたであらう

う第二草稿は、その大半が失われている。残っているのは四〇ページから四三ページまでの、さいこの四ページにすぎない。この部分でマルクスは、「私的所有の關係はそれ自身のうちに潜在的に、労働としての私的所有の關係と資本としての私的所有の關係、およびこれら兩表現の相互の連関をふくんでいる」といい、「労働、資本、および兩者の連関」の総括的要約でしめくくっている。「ミル評注」と『経哲草稿』の区別と連関の問題、とりわけ、この時点のマルクスが商品・貨幣關係と資本關係との連関をどうとらえていたか、を追究する上で、第二草稿の大部分の紛失はまことに手痛いことといわなければなるまい。⁽⁸⁾

いずれにせよ、商品・貨幣Ⅱ市民關係と、資本・賃労働Ⅱ階級關係と、自然Ⅱ人間關係と、あるいは市民社會と資本主義社會と人間の社會と、この三層の区別と連関の問題は、思想と科學と実践の構造連関の問題と密接に結合しつつ、マルクスの經濟學批判をつらぬく根本問題といつてよい。さいぎんの『經濟學批判要綱』研究の進展は、この根本問題を究明するうえで著しい前進をしめしている。「ミル評注」と『経哲草稿』の關係という一見些細な問題も、この根本問題―

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序(細見)

「カール・マルクス問題」に、ふかかかかわるものであることは、たしかなように思われる。⁽⁹⁾

(1) 独訳版として『Der junge Marx im Spiegel der Literatur, Dietz Verlag 1965.』がある。

(2) この論文は「ラーゼンの『若キマルクス』Mororoi Mappkeの第六章「共產主義の經濟學的・哲學的基礎づけ」の一部分(とくに第一節「マルクスの經濟學研究的の開始」、第二節「所得の三源泉の分析」)を、再編補充して書かれたものらしい。この点、經濟原論研究会で私の紹介報告を聞かれた佐藤金三郎氏から、さっそくに「教示をいただいた。松岡保氏にMororoi Mappkeをお借りして、『ドイツ哲學雜誌』の論文と対比してみたが、わたしの貧弱なロシア語読解力でも、たしかにほとんど同趣旨(部分的にはまったく同文)の叙述がみいだされる。ただしドイツ語論文では、全体の構成にかなりの加工がくわえられている。なお、『ドイツ哲學雜誌』には、ラーゼン論文がオリジナル論文か、すでに発表されたロシア語論文のドイツ語訳か、についての注記はない。

(3) 杉原・重田訳『經濟學ノート』七ページ以下の「概観」を参照。

(4) Marx Engels Werke, Ergänzungsband, Teil 1, Ss. 494-5. 城塚登・田中古六訳『經濟學・哲學草稿』(岩波文庫)五七七八ページ。

(5) 「ミル評注」の拙訳への解説。『立命館經濟學』第十卷第四号(一九六一年)、一一〇―一二三ページ。

立命館経済学（第十九卷・第三号）

七〇（三三二）

(6) 拙稿「マルクスとヘーゲル——経済学批判と弁証法——」。
経済学史学会編『資本論の成立』（岩波書店、一九六七年）、
とくに一三一—一三六ページ。

(7) 第一草稿↓「ミル評注」↓第二・第三草稿、という執筆順序
は、ラーピン論文に先だって、すでにわが国で中川弘氏によ
って提起されていた。中川氏は、力作『経済学・哲学草稿』
と「ミル評注」（福島大学『商学論集』第三七卷第二号、一
九六八年一〇月）の「補註」（同上、一六一—一八ページ）に
おいて、

① 一八四三—四四年段階のマルクスの近代市民社会分析に
おける、二つの分析基準の並存、すなわち商品貨幣関係基
準（「ユダヤ人問題によせて」↓「ミル評注」）と、資本関係基
準（「ヘーゲル法哲学批判序説」↓「経哲草稿」）との並存の強
調。そして『経哲草稿』以後、四〇年代には資本関係基準の
分析が深められていくが、五〇年代に入るや商品論・貨幣論
が「復位」され、かくて厳密な価値論・貨幣論の基礎のうえ
に真に科学性をもちうる剰余価値論・資本蓄積論が展開され
ていくという、二つの分析基準の連関把握。

② 『経哲草稿』第一草稿と「ミル評注」の執筆時期にかん
する諸推定のつきあわせ。

③ 第一草稿にはミルの名前も引用文もなく、第二草稿では
じめてミルの名前が現われ、ミルからの引用文は第三草稿に
はじめて見いだされること。

以上の三点をよりどころとして、「ミル評注」↓「経哲草稿」
という私の推定に対置して、「執筆順序は細見氏とは逆に、

第一草稿——「ミル評注」——第二、第三草稿という推定も可
能であるかと思われる」と記されている。中川氏は慎重にも
「いずれもおよそ推定の域を出ないものである以上、ここで
は文献史的問題のこれ以上の詮索はひとまず留保」とするとい
っておられるが、私は氏の推定の方が正しいと考える。

(8) 杉原・重田訳『経済学ノート』第二版への増補解説で紹介
されているように、「ミル評注」のロシア語訳（哲学の諸問
題」、一九六六年第二号所収）につけられた短い解説のなか
で解説者は、第二草稿の失われた部分こそ『経哲草稿』の中
心部分であったと推定している。「ミル評注」との関連につ
いても興味ぶかい指摘がおこなわれているので、当該箇所を
訳出しておこう（翻訳は、小野一郎氏に負う）。

「マルクスのこの評注は、その内容からみて、『一八四四
年の経済学・哲学草稿』と密接な関連をもっている。あらゆ
る点からみてそれは、一八四四年の第二の（基本的な）草稿
以前に書きあげられていた。よく知られているように、一八
四四年のこの第二草稿のうち、現在まで残っているのは最後
の四ページにすぎない。そこでは、理路整然とした叙述から、
今後さらに展開されるべき思想の簡潔で要約的な素描へと移
っている。現在残っていない三九ページの大きな草稿にこそ、
あらゆる点からみて、基本的な批判的・経済学的研究が含ま
れていた。これに対して、第一草稿は準備的素材であり、第
三草稿は、「三六ページへの付論」、「三九ページへの付論」、
「同ページへの付論」といったことばで始まる補論である
（この補論は、そのうちにふくまれていた思想の豊かさから

いて、きわめて重要ではあるが)。

このマルクスの評注は、一八四四年のかれの第一の(準備的)草稿と同じく、第二草稿のうち、こんにち残っていないはじめの三九ページでおそらく展開されていたであろう思想について、およそそれがどういうものであったかを、推測することを可能にする。ミルの著書の要約をふくむマルクスのノートでは、マルクス自身の評注の大部分はタテ線で消されている。自分のノートの、のちの著作で利用したページについては、こうするのがマルクスの流儀であった。この評注の内容は、われわれに知られているどのマルクスの著作にも再現していないから、それはまさに、一八四四年の第二草稿のこんにち伝わっていない部分において利用された、と考えることができよう。(Вопросы философии, 1966, No. 2, стр. 113.)

(9) 以上、「ミル評注」と『経哲草稿』の関連の再検討について、稲村勲氏との討論が有益であった。この問題の本格的な追究は、なお今後の課題である。

二 第一草稿の執筆順序

ラービン論文にもどろう。

マルクスは経済学の研究を、ノートIでのセー、スカルベクの抜粋からはじめ、ひきつづいてスマイスの『国富論』にと

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序(細見)

りくんだ。この著作の科学的価値をただちにみぬいたマルクスは、ノートIIとIIIで、『経済学ノート』のなかで一書にされたスペースとしては最大のスペースをさいて、『国富論』全編にわたる入念な抜粋をおこなう。このスマイス研究の過程でマルクスの問題関心は、労賃、利潤、地代の問題に集中していった。階級闘争の實在的基盤の解明を経済学研究の目的にすえていたマルクスには、三大階級の所得源泉の分析から始めることによって、社会と政治の諸問題の根元をつかみうると思われたのである。『国富論』の抜粋を終えてマルクスは、この分析にとりかかった。『経哲草稿』の第一草稿がそれである。

ラービン論文の第二節、第三節は、第一草稿のうち「疎外された労働」に先だつ部分、マルクスの原稿にして二十一ページにわたる部分の、理論的・考証的な検討にあてられている。

この部分の原稿は、その大半のページが縦線で三つの欄に分けられ、各ページの各欄には、あらかじめ「労賃」「資本の利潤」「地代」という標題がつけられていて、各欄はその標題にみあった記述でうめられている。要するにマルクスは、

三つの項目について平、行して、叙述しているのである。

そこでラーピンは、こう問題を提起する。マルクスはこの三つの欄を、どんな順序でうめていったのだろうか、と。これはさしあたり、文献考証的な問題である。だが、「疎外された労働」断片はこの部分のすぐあとに書きこまれているのだから、この文献考証的な問題をとくことは、ラーピンもいうとおり、「深く内容にかかわる問題、すなわち、マルクスの思惟の歩みは現実にはどのような道をとおって、一八四四年草稿のあの中心カテゴリーの成立へとすすんでいったのか、という問題」をとくカギを与えるであろう。

これまでこの部分は、「労賃」「資本の利潤」「地代」の順序で印刷され、発表されてきた。それは、三つの平行する本文も、執筆順序としては「左から右へ」、すなわち「労賃」↓「利潤」↓「地代」の順序で執筆された、という想定にもとづいてのことであつたらう。だがフォトコピーを検討するとき、こうした想定は根本的に改めなければならない、とラーピンはいう。

二十一ページにわたる原稿は、原則として、三つの欄に区分されて、各欄にはそれぞれ、「労賃」「利潤」「地代」にか

んする論述が書きこまれている。だがラーピンによれば、二つの箇所でのこの原則は破られている。

一、七ページ。このページも三つの欄に区分され、各欄にはそれぞれ標題が記入されているけれども、しかし本文はすべて、労賃にかんする論述でうめられている。「労賃」の項のマルクス自身の文章は、このページで終っている。

二、十三ページから十六ページまでは、三つでなくて二つの欄に区分され、それぞれに、「労賃」「資本の利潤」の標題が書きこまれている。「労賃」の項は十五ページで終り、「資本の利潤」の項は十六ページまでつづいてこのページで終っている。十六ページの残りには「地代」にかんする論述が書かれている。

原稿のこのような状態から、ラーピンは、七ページと十五—十六ページとを「二つの信すべき里程碑」として、所得の三源泉分析のマルクスの作業を「三つの主要段階」に分割する。

第一段階

「労賃」の前半（一—七ページ）

「利潤」の前半（一—六ページ）

「地代」の始めの部分（一一六ページ）

第二段階

「労賃」の後半（八一五ページ）

「利潤」の後半（八一六ページ）

「地代」の続きの部分（八一十二ページ）

第三段階

「地代」の最後の部分（十六―二十一ページ）

右にマルクスの原稿のページにそくして記した段階区分の区切りを、「労賃」「利潤」「地代」の各項目について、ドイツ語版『マル・エン全集』補巻I（MEWと略記）、ならびに青木文庫、国民文庫、岩波文庫の三種の邦訳のページと行数で示すと、次のとおりである。

「労賃」の第一段階の終り

MEW 四七七ページ 下から五行目

青木 三七ページ 最後の行

国民 四〇ページ 後から四行目

岩波 二八ページ 最後の行

「利潤」の第一段階の終り

MEW 四八八ページ 最後の行

青木 六七ページ 後から四行目

国民 六〇ページ 後から三行目

岩波 四八ページ 一二行目

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序（細見）

「地代」の第一段階の終り

MEW 五〇一ページ 一四行目

青木 九二ページ 後から三行目

国民 八一ページ 最後の行

岩波 六八ページ 最後の行

「地代」の第二段階の終り

MEW 五〇四ページ 一四行目

青木 九七ページ 一〇行目

国民 八六ページ 九行目

岩波 七三ページ 後から三行目

ただし、以上の区切りは、原稿のページにそのままあわせてものであって、それがマルクスの作業段階の境界を、行数についてまで正確に示すものとは必ずしもいえないことを、ラービンはこゝとわっている。マルクスはある欄に余白を残したままひとつの段階を終え、次の段階の作業をその余白にすくづつけて書き始めていることもあるからである。このことは、とくに「利潤」と「地代」の第一段階と第二段階の区切りについて、あてはまるという。

したがって第一草稿は、「労賃」↓「利潤」↓「地代」の順序で書かれたのではないのだ。三つの項目の平行は、マルクスが所得の三源泉の研究を、現実、に平行してすすめて、いつたこゝとを反映しているのである。しかもこの研究過程の内容を検討するとき、マルクスがこうした対比的考察を、意識的に

「発見的方法」(heuristische Methode)として用いたことは明らかであり、この方法によって新たな問題設定と問題解明にいたりえたのだ、とラーピンはいう。

このことをラーピンは、三つの段階、とりわけ第一、第二段階における三つの項目の、執筆順序とそれをつらぬくマルクスの問題追究のスジみちを、追跡することによって証明しようとする。大筋は次のとおり。

第一段階

第一段階はどの項目から書きはじめられたか。ふつうには「左から右へ」というのが自然の順序だから、「労賃」の項からだと思われる。だがラーピンは、マルクスが着手したのは「資本の利潤」の項からだという。

「利潤」「地代」の二つの項と「労賃」の項とを対比するとき、前者では、スミスの重要な諸命題がほとんどスミスのことばどおり引用されている。これに反して「労賃」の項では、それらの命題をマルクスはソシヤクして自分のことばにねりなおし、自分自身の思考の歩みのうちに有機的にくみこんでいる。このような事例を少なくとも十二は指摘できる、とラーピンはいう。ここから、「労賃」の項が「利潤」「地

代」のあとから書かれたことは明らかである。

では「利潤」と「地代」ではどちらが先か。ラーピンは、この二項目の最初の部分の引用典拠と引用の仕方注目する。

最初の引用は、いずれもセーの『概論』第一卷一三六ページの注からおこなわれている。つぎに「地代」の項の第二の引用の典拠は、「利潤」の項の第二節の最初の引用(スミス『富論』第一卷九七—九九ページから)と一致する。ところで引用の仕方についてみれば、「利潤」の項ではマルクスは、みずから問題を設定し、セーやスミスを引用しながらこれに解答をあたえるという形で叙述をすすめているのに対して、「地代」の項は、いきなりセーの引用からはじまり、そのあとスミスからの引用がかなり長くつづいている。その間、マルクス自身の問題追究の構想は不明のままである。

以上のことからラーピンは、「地代」のはじめの部分の引用は、「利潤」の項を執筆する過程で派生してきたものとみる。すなわち、マルクスは「利潤」の項の冒頭で資本の起源を問い、これにたいする解答をセーにもとめて引用するが、その同じセーの文章のなかに、土地所有の起源にかんする叙述を見いだした。これをマルクスは、「地代」の欄の冒頭に

書きうつす。「利潤」の第二節にすんで最初に引用したミス『国富論』の同じページに、地代にかんする論及がみだされた。これを「地代」の欄に抜粋する。こうしてマルクスは、第一段階の作業を資本の利潤の論究ではじめながら、同時に派生的に、「地代」についていくつかの抜粋を記入していった。そしてやがて、原稿の三ページにはいってはじめ、地代にかんするマルクス自身の問題設定と、地代の階級の本質を洞察した基本命題がうちだされる。これ以後、ラーピンによれば、「地代」の項の記述は「利潤」の項との直接的関連を失い、独自のプランにしたがって展開されていくのである。

内容的検討からえられた以上の結論は、原稿の筆跡上の特徴からも確認される。⁽²⁾「利潤」欄の文章は「労賃」欄の文章にくらべて、「どんな原稿でも書き始めの部分がそうであるように」、字間も行間もいくぶんゆったりと書かれている。「利潤」と「地代」の最初の部分は同じ筆跡で書かれていて、執筆の同時性をうらづける。さらに、「利潤」の欄には他の二つの欄よりも広いスペースがさかれており、とくに第一ページは特徴的である。というのは、「利潤」と「地代」

の欄を区切るさいしょに引かれた線の右側に、マルクスはもう一本太い線を引き、こうして「地代」欄を犠牲にして扱われた「利潤」欄いっぱい、利潤にかんする文章を書きこんでいるのである。このことはふたたび、原稿の執筆は「利潤」の項から始められたことを示している。

以上の内容的ならびに筆跡上の分析から、ラーピンは、『経哲草稿』が「資本の利潤」から着手されたことを確定し、このことの「方法的意義」の重要性を強調する。ただし、マルクスが利潤の分析から『経哲草稿』を始めたことは、それが最初から、ブルジョア社会の全問題の根元を資本のうち、利潤という特定の現象と結びつけた資本の本質のうち、みぬいていたことを証明するからである。

さて、「資本、すなわち他人の労働の生産物にたいする私的所有は、なににもとづくか」の *Agg. p. 39*。⁽³⁾これが、第一段階の——したがって『経哲草稿』の——冒頭の問題設定であった。この問題設定にはじまる分析作業が、どのようにすすめられていくか。

マルクスはセーとスマスから引用したのちに、ただちにいうている、「資本とは、労働とその生産物にたいする支配権

力である」(S. 484, p. 40)。資本は階級間の特定の関係である。まさにこの視角、階級間の関係という視角からマルクスは、他の二つの所得源泉をもとらえている。「地代は借地、農と地主とのあいだの闘争をとおして確定される」(S. 499, p. 65)。「労賃は、資本家と労働者との敵対的な闘争をつうじて決定される」(S. 471, p. 17)。「労賃」の冒頭におかれたこのテーゼは、それ自体としては根拠づけを欠いた独断命題のようにみえる。だがそれも、「利潤」「地代」断片での具体的な分析をつうじてその結論としてひきだされ、「労賃」断片の冒頭におかれたのであった。

したがって、第一段階での「利潤」と「地代」の分析において、マルクスが独自につかんだもつとも価値高い成果は、三階級の闘争こそ、すべての所得源泉の實在的で生きた内容をなすという着想であった。「利潤」「地代」断片のそれ以外の内容は、ほとんどスミスの著作の抜粋からなり、それらをマルクスは独特のやり方で類別し、簡潔に要約している。だが総括的なコメントと、マルクス自身の分析は見あたらない。とりわけ「利潤」断片の第三節には、「労働にたいする資本の支配と資本家の動機」という思わせぶりの標題がつい

ているのに、その中味はすべてスミスとセーからの抜粋である。これほどかれの関心の深いテーマについて、マルクスになにも言いたいことがなかったとは、とうてい信ぜられないではないか。

それが、「労賃」の項でおこなわれているのだ、とラービンはいう。第一段階の最後に書かれた「労賃」の論述こそ、マルクスが「利潤」「地代」の項で凝縮させた具体的な経済的素材の、理論的、要約にはかならない。ここでマルクスは、セーやスミスの述べていることを、労働者階級の利害という観点から铸なおして、自分自身のまとまった考え方をうちだしている。そのさいマルクスは、抜粋ノートのみならずセーやスミスの原典にもたしかえり、とくに『国富論』の「労賃」の章で提起されている三つの主要な社会状態——衰退的・発展的・停滞的——の問題を中心にすえて、スミスとはちがってブルジョア社会を断罪する立場から、「利潤」「地代」断片で収集した多くの素材を再構成しているのである。

とりわけ興味ぶかいのは、「労賃」断片の——第一段階に属する——最後の部分である。それは原稿の七ページの第二欄と第三欄に、太い線でその前の文章から区別して書きこま

れている。形式的にも内容的にもこの部分は、第一段階の作業のしめくりになっている (S. 477, p. 27-28)。

最初の五つのパラグラフでは、「労賃」の項での論述が要約されている。だがそれにくづつつけてマルクスは、「原理的に新しい」見地をうちだしている。これまでのところでは、かれは「まったく国民経済学者の立場にたつて」(S. 475, p. 29)、ブルジョア経済学の内在的批判をおこなってきた。その地平をマルクスは、いまやのりこえようとする。

「いまやわれわれは、国民経済学の高地をのりこえて、ほとんど国民経済学者のことばでのべてきたこれまでの展開から、二つの問題に答えてみよう。

一、人類の大部分がこのように抽象的な労働へと還元されていることは、人類の発展においてどのような意味をもつか？

二、労賃をひきあげて、これによって労働者階級の状態を改善しようと望んだり、あるいは労賃の平等を（ブルードンのように）社会革命の目的と考える改革者たちは、こまかくたちいれればどんな誤りをおかしているか？

労働は、国民経済学では営利活動という姿でしか現われ

『経哲草稿』第一章稿の執筆順序（細見）

ないだろう」(S. 477, p. 28)。

ここに提起された二つの問題は、「社会にかんする学問の二つの根本問題」である。人類史の発展方向の問題と、この方向を推進する手段方策の問題と。この二つの根本問題にマルクスは答えようとした。だが解答は、ここでは最初の一行でとぎれている。どうしてか？「明らかにマルクスは、もっと多くの材料を利用しつくすことなしには、厳密な諸命題の定式化に移りえないことに気づいたのだ」とラーピンはいう。第二、第三段階での研究をふまえて右の問題への解答をこころみるのが、いうまでもなく「疎外された労働」断片である。

第二段階

ではマルクスが、「二つの根本問題」にたいする解答を中断して追究しなければならなかった問題は何か。それは、大資本と小資本、大土地所有と小土地所有の競争と、その結果の問題であった。

第二段階も、「資本の利潤」から着手されたとラーピンは推定する。その根拠は、「労賃」の項の抜粋（第二段階の「労賃」断片はすべて抜粋からなっている）は、のちにもみるように

「利潤」の項の執筆の過程で始められたものであること、他方、第二段階における「地代」断片の文章には、「利潤」の項のうち、シュルツからの抜粋に先だつ部分の論述への、明白な言及がふくまれているからである。

「利潤」の項の第四節「資本の蓄積と資本家間の競争」の途中から、マルクスは第二段階の執筆を開始した。そこでのマルクスの問題関心の中心は、大資本と小資本との闘争である。この闘争においてはすべての点で、大資本家が優位にたち、小資本家を征服し、あるいは破滅させて、独占者となる（S. 488-491, p. 48-53）。同様の事態をマルクスは、次には土地所有について確認する。「一般的にみても、大土地所有と小土地所有とのあいだの事情は、大資本と小資本とのあいだの事情と同様である」(S. 493, p. 54)。そればかりでない。土地所有においては「大土地所有の蓄積と、大土地所有による小土地所有の併吞とを、無条件にもたらす特殊な事情がある」（同上）として、この特殊な事情が分析される。

工業、農業の両部面における大所有の勝利を確認したのちに、マルクスは、シュルツ、ベクトール、ビュレらの著作の抜粋を始めたのであった。かれはシュルツの『生産の運動』か

らの抜粋にうつるにあたって、次のように記している。「一般に大資本の蓄積のさいには、ヨリ小さい資本家に比較して、固定資本の集中と単純化もまた相当に進行する。大資本家は自分のために、労働諸用具の一種の組織化を導入する」(S. 491, p. 53)。ここからラーピンは、シュルツの本にマルクスの求めたものは、直接には大資本経営の特質のいっそう綿密な研究にあつたろうと推定する。だがシュルツの著作には、マルクスの求めた問題についての考察はほとんどふくまれていなかった。そのかわり、この本のなかにマルクスは、資本家による労働者の仮借なき搾取にかんする印象的な叙述をみいだしたのである。そうした叙述をマルクスは、「利潤」だけでなく「労賃」の項にも引用する。つづいて、同様のテーマについてベクトールやビュレの著作からも抜粋する。「利潤」の項の抜粋典拠は、シュルツ↓ベクトール↓ビュレ↓スミス↓シュルツとなっており、「労賃」の項のそれは、シュルツ↓ベクトール↓ルードン↓ビュレの順になっていて、ほぼ平行している。マルクスは、一冊ずつ読んではかれの関心をひく重要な箇所を、「利潤」と「労賃」の両項に、同時に抜粋していったのであろう。かれはこの作業を、原稿の十三ペー

ジ以下では各ページを三つの欄でなく、「労賃」と「利潤」の二つの欄に分けておこなっている。

こうした抜粋作業の最後になって、マルクスは、抜粋をはじめた最初の問題にたちかえった。そこで、「利潤」の項にあらためてシュルツから長い引用をおこなったのちに、次の簡潔な要約を与えている。「諸資本の蓄積は増大し、諸資本の競争は減少する。というのは、資本と土地占有とが一つの手中に集められるからであり、同様に、資本が大きくなって種々の生産部門を結合できるようになるからである」(S. 497, p. 61)。

この文章で、所得の三源泉分析の第二段階は基本的に終る。だが、ラーピンはいう、ここではマルクスは、工業における大資本、大経営の特質の理解についてはほとんど前進していない、と。この問題の追究のためには、当時かれが手にしていた材料ではまったく不十分であった。農業における大経営、大土地所有の問題については事情がことなる。「農業大経営の歴史的発展傾向の解明に、マルクスはひきつづき、分析のさいこの第三段階でとり組む」のである。

第三段階

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序(細見)

第三段階は、原稿でいえば十六ページから二十一ページまで。すべて「地代」にかんする考察である。十七ページでマルクスは、大土地所有と小土地所有の競争の結果を総括して、次のようにいつている。

「土地所有の大部分が資本家の手中におち、こうして資本家たちは同時に地主となる。実際のところ比較的小さい地主たちは、そもそもすでに資本家でしかないのであるが。同様にまた、一部の大土地所有が同時に工業的となる。

したがって、最後の結果は資本家と地主とのあいだの区別の解消である。こうして全体としては、もはや住民の二つの階級、労働者階級と資本家階級とだけが存在することになる。土地所有がこのように掛値売りされること、土地所有が商品へと転化することは、古い貴族制の最終的崩壊であり、貨幣貴族制の最終的完成である」(S. 505, p. 75-76)。

この結論的命題をふえんするかたちでマルクスは、以下二つの項に分けて論述する。この部分をラーピンは、マルクスによる大土地所有の歴史的発展傾向の試論的解明として、簡潔にあとづけている。

ゲルマン民族のもとでは大土地占有は、封建的土地独占の

かたちではじめて現われた。近代にいたって封建的大土地占有は解体され、多数の小占有者のあいだに分割される。これとともに、土地も競争場裡に投げこまれ、競争をつうじて比較的大きな経営が小経営を駆逐し併呑して、ふたたび新しい形態での大土地占有を、資本制的大土地占有をうちたてる。

資本制の大土地占有も、みずからの墓穴を掘る。それは、農業労働者の賃金を最低限におしきげる。だが工業との、また外国農業との競争のもとでは、「最低限にきり上げられた労賃も、新たな競争にたえぬくためにはなお一層きり上げられなければならない。かくてそれは必然的に、革命へとみちびく」(S. 509-510, p. 83)。資本制的土地占有の廃棄、私的土地所有一般の止揚のうえに、マルクスは、大土地占有の第三の形態、社会主義的協同体(ソビエト)を展望する。「土地に適用された協同体は、国民経済学的な意味での大土地占有の長所を分かちもち、同時に〔土地占有の〕分割のもつ本来の傾向たる平等を、はじめて実現する」(S. 508, p. 79)。

ここにいう「協同体」は、いうまでもなく、マルクスがフランス社会主義者の用語から借りてきたものである。私的所有の発展法則それ自体によって私的所有は止揚され、「協同

体」が実現される——この法則を、エンゲルスと同じくマルクスも、農業だけでなく工業にも拡張する。「土地所有は、これら二つのいずれの方法でも(分割を強制的に禁止する諸条件のもとでも、自由競争の諸法則にしたがっても——ラービン)発展しながら、いずれの方法でも必然的に没落しなければならなかった。同様に工業も、独占の形態でも競争の形態でも破壊して、人間を信ずることを学ばねばならなかった」(S. 510, p. 83)。

この人間主義的・社会主義的な結論で、所得の三源泉の分析は終わっている。したがってまたこれが、資本制的大所有の本性と展望にかんする、マルクスの分析の結論でもあった。まさにこの点を明らかにするために、マルクスは、第一段階のさいごに提起した二つの根本問題への解答を中断してきたのである。いまや解答をおこなう時がきた。——その解答を、われわれは、次のページから始まる「疎外された労働」断片のうちに見いだすのである。

以上が、ラービンが第一草稿のフォトコピーを検討しつつ描きあげた、マルクスの草稿執筆の順序であり、マルクスに

よる問題追究のスジみちである。もちろん、いかにフォトコピーを手元におこうとも、マルクスの平行的な問題追究の執筆の順序を完全に復元することは不可能であり、とうぜんながらいくばくかの推定が介入することは避けがたい。そしてラーピンのくわえている推定と、それにもとづく論点整理にも、なお不明確な点、検討すべき余地の残されていることもたしかである。とはいえ、「労賃」「利潤」「地代」の三項目の平行的記述が、マルクスによる問題追究の過程そのものの平行・交錯の反映であることを強調して、マルクスの分析的思惟の歩みを（細部はともかくとして）大筋において浮きぼりにした功績は、高く評価されてよいであろう。これまでに、「労賃」「利潤」「地代」の順序で印刷された版本で第一草稿のこの部分を読むばあい、それらが平行して叙述されたものであることを念頭においていてもなお、論点の推移と連関が、もひとつハッキリと浮かびあがらないぎりぎりがあった。いまラーピンの説く順序で読みかえすとき、論究のスジみちはいささかスナナリすぎるほどスナナリと、「疎外された労働」断片の最初のパラグラフにつながっていくのである。

『経哲草稿』第一章稿の執筆順序（細見）

ただし、ラーピンもさいごにクギをさして言っているとおり、「疎外された労働」の概念は、所得の三源泉の分析のみからひきだされたものではない。それは「はるかに複雑な道へて」、生成しえたものである。ヘーゲル、フョイエルバッハとの関連。マルクス自身の歩みにそくしてみても、『ヘーゲル国法論批判』から『独仏年誌』へと、疎外とその止揚の認識は深められていく。だが、哲学的、経済的、政治的な各分野における疎外の把握が、一つの体系的な思想にまとめあげられるためには、疎外の現実的な実体が、歴史的に規定された労働の性格のうちに見いだされなければならなかった。所得の三源泉の分析は、市民社会、貨幣、国家、革命の諸問題を、労働の問題性へとひきよせるのに大いに役立ったのである。所得の三源泉の対比的分析をすすめていくなかでマルクスの眼は、ますます労働の性格の問題に、ブルジョア社会における労働者の窮乏とかれの労働の質との必然的連関の問題に、ひきつけられていった。「疎外された労働」の思想は、この問題にたいする正面からのとり組みであり、解答である。このことをラーピンは確言する。しかもなお、「疎外された労働」の思想は、それに先だつマルクスの思惟の歩

みの、第一草稿の先行部分さえも、直接の連続ではない。そこには一つの飛躍がある。第一草稿の先行部分について綿密な考証をかさねてきたラーピンが、にもかかわらず（いや、なればこそ）次の印象的な文章でかれの論文をしめくくるとき、私はラーピンのこのことは、深い共感を禁じえない。

「にもかかわらず、これまで述べてきたことは、疎外された労働の思想を、以前に存在した前提の実現にすぎぬものとか、以前に提起された問題にたいする解答にすぎぬものとかみなすことを、許すものではない。それはうたがいがいもなく、まれにみる能力と氣力をそなえた偉大な精神の飛翔である。この精神にとつては、それに先だつ發展は必然的な動機ではあつても、つねにひとつの動機ではない。かかる飛翔の創造的本性は、まさに、その飛翔がみずから費消しうるよりもはるかに大きなエネルギーを放出し、それゆえ媒介をへることなしには自分が先になつていたその場所に、すぐにはたち戻れないところに示されている」。

二十有余年の媒介をへて、マルクスは「収入とその源泉」にたち戻つた。

(一) そのうち四つの具体例を、ラーピンはあげている。

①「利潤」の項でマルクスは、次の命題をほとんどスミスのごとくどおりに写している。「通常の利得のたつしうる最高率は、……供給される商品の労賃を最低の価格まで、すなわち、労働期間中の労働者のたんなる生存費にまで、切り下げたときの率である。……スミス、第一巻、一九八ページ。」（ドイツ語版『マル・エン全集』補巻一、S. 265. 岩波文庫『経哲草稿』P. 43.）

「労賃」の項ではマルクスは、右の命題を、かれ自身の思考の歩みに有機的に組みいれている。「労賃の最低の、唯一の必然的な率は、労働期間中の労働者の生計を維持し、そしてせいぜい、かれが家族を養うことができ、労働者種族を絶やさないだけのものである。」（S. 471, p. 18.）

②「利潤」の項では、次の命題もスミスの原典から分離されていない。「同一の社会では、諸資本の利得の平均率は、あい異なる職種の労働の賃金とくらべて、はるかに同一水準に近づいている。第一巻、二二八ページ。」（S. 267, p. 45.）「労賃」の項では右の命題が、マルクス自身の結論に銜なおされ、しかも下線をひいて強調されている。「あい異なる職種、労働者の労働価格は、資本が投下されるあい異なる部門の利得とくらべて、はるかに千差万別である。」（S. 472, p. 20.）

③「労賃」の項でマルクスは、労働者にはかれがつくつた生産物のごく僅かな部分しか配分されないのたいていして、「怠けものの地主の地代は、たいてい土地生産物の三分の一にたつし、働きものの資本家の利潤は、貨幣利子の二倍にも

なる」(S. 476, p. 25.) といっている。

こうした具体的な記述の出所を、われわれは、「利潤」と「地代」の項の文章に見いだす。(f) 「地代」の項でマルクスは、スミスから引用している。「土地表面の地代は、それゆえ、たいいてい総生産物の三分の一にたつするにすぎず……」(S. 500, p. 66.)。(g) 「利潤」の項でのスミスからの引用。

「大ブリテンでは、商人たちが妥当な、糧当な、合理的な利潤とよんでいるものは、利子の二倍と計算されている。……スミス、第一巻、一九八ページ。」(S. 485, p. 42.)

④ 「利潤」の項でマルクスは、「労働のもっとも重要な活動は、資本を使用する人々の計画と意思にしたがって、規制され指導されている」とスミスから引用し(S. 487, p. 46.)、「労賃」の項では、次のように注釈をくわえている。「まさしく、資本家は自分の資本を別の面にむけることもできるのだということが、ある特定の労働部門にしばらくつけられている労働者に、くいはぐれるか、それがいやなら、この資本家のいっさいの要求に屈服することを強制するのである。」(S. 472, p. 19.)

以上のように、「利潤」「地代」の項ではほとんど文字どおりスミスから引用されている諸命題が、「労賃」の項では、マルクス自身のことばと思想に改鑄されていることを、ラーピンはくりかえし強調している。

(2) 『マル・エン全集』ドイツ語版補巻1、四九六ページ見開きに収録されている、『経哲草稿』原稿第一ページの写真を参照されたい。

『経哲草稿』第一草稿の執筆順序(細見)

(3) () 内の S. : は『マル・エン全集』ドイツ語版補巻1の

p. : は岩波文庫『経哲草稿』の、ページ数を表わす。『経哲草稿』の訳文については、青木文庫(三浦和男訳)、国民文庫(藤野涉訳)にもふだんから大いにお世話になっているが、岩波文庫版には欄外にマルクスの原稿のページ数が付記されており、この紹介文の主題からいってとくに便利である。なお、本節の全体をつうじて、引用ページを指示せずにかギ括弧でくくっている文章は、すべてラーピン論文からの引用である。

(4) ラーピンは脚注で、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』の、「占有の集中は、他のすべての法則と同じく、私的所有に内在的な法則である。中間の諸階級はますます消滅して、ついに世界は百万長者と貧民に、大土地占有者と貧しい日雇労働者に、分かれるにちがいない。」につづく次の文章を引用している。「法律も、土地占有の分割も、ひょっとしておこるかも知れない資本の分散化も、すべてなんの役にもたない。——もし社会関係の完全な変革、対立する利害の融和、私的所有の止揚が、そのまえにおこななければ、こうした結果は生じるにちがいないし、また生じるであろう」(Marx Engels Werke, Bd. I, S. 522.)。この引用に付加してラーピンは言っている。『大綱』のエンゲルスは社会主義革命の不可避性を、主として不断に増大する産業恐慌の結果として証明した。それゆえにマルクスは、経済学研究の第一段階において、社会主義の不可避性を農業を例にとって展開する必要があると考えたのであろう、と。